九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「作家さん」が示す「新たな主婦」の可能性 : 「生活者運動」論を手がかりにして

里村, 和歌子

https://doi.org/10.15017/1543671

出版情報 : 地球社会統合科学研究. 3, pp.15-26, 2015-09-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン :
権利関係 :

『地球社会統合科学研究』3号 15～26
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.3，pp. 15～26

「作家さん」が示す「新たな主婦」の可能性
――「生活者運動」論を手がかりにして

里村　和歌子（サトムラ　ワカコ）

1．はじめに

本稿では、ハンドメイド作品を制作し自ら販売する主婦である「作家さん」にひかりを当てる。彼女たちはナチュラル系という、エコロジーをルーツにしたファッション様式を志向しているが、同じように、70年代から定着した「生活者運動」も、主婦が主体となってエコロジーを思想的根拠としている点で、表象的には行為主体も求める価値も似通っている。では、両者は同じものだと言うことができるだろうか。

昨今ではケアと労働の観点から福祉ワーカーズ・コレクティブに着目した研究が蓄積されているが（朝倉 2002；安立 2008；山根 2010；上野 2011）、その端緒である「生活者運動」については、80年代後半から90年代にかけて天野正子と佐藤慶幸を中心にその課題と可能性が議論されてきた。本稿の目的は、「生活者運動」研究に「作家さん」という表象的に似通った現代主婦たちのフィールドデータを補うことで、これまでの「生活者運動」研究を補足し「新たな主婦」の可能性を探ることである。

「生活者運動」は1968年に設立された生活クラブ生協運動に代表される「新しい社会運動」の一つであり、「生活者」の研究を重ねてきた天野正子の定義によれば、「生活者運動」とは、先進産業社会が追い求めてきた「物質主義的」価値への反省を含む「脱物質的」価値への転換を求める運動である（天野 1995:44）。そして、「生活者」とは、それぞれの時代によりさまざまな意味をこめられた一つの「理想型」として使われてきた概念であるが、そこに通底しているのは「それぞれの時代の支配的な価値から自律的な、いいかえれば「対抗的」な「生活」を、隣りあって生きる他者との共同行為によって共にめざす行動原理にたつ人びと」（天野 1995：64）を意味する概念であるとしている。つまり、生活者とは、(1) 支配的な価値から自律的である、(2) オルタナティブな生活を目指している、(3) 他者との協同行為を行っている、という要素を満たした概念であると言える。そして、「消費点」を足場に置いた「生活者運動」は社会運動を飛びこえ、「新しい政治運動」である代理人運動（1977）、「新しい労働」であるワーカーズ・コレクティブ（1982）へと展開した。

ここで彼女たちが採ったのは「脱物質的」価値への転換を目指す運動、すなわちエコロジーと共通している。萩原なつ子によれば、エコロジー（環境思想、環境運動）は、「本来、人間は自然の生態系の一部であると認識し、人間が自然と調和して生きるための思想および社会的、政治的運動として起こった」運動である。エコロジー思想はさまざまであるが、萩原の整理に従うと、共通する基本理念として、①自然環境および発展途上国の人々に負担を強いるような開発のあり方、現在の資源浪費型（大量生産、大量消費、大量廃棄）の経済優先システムを改め、より簡素な生産様式とライフスタイルに変える、②権力が一つのところに集中しない草の根民主主義社会を実現させる、③あらゆる暴力、つまり人間による自然の支配、人間による人間の支配を否定し、あらゆる生命を尊重した、多様性を認めあう社会をつくる、という三つが挙げられる（萩原 1997：294）。ここで「生活者運動」を振り返るなら、「生活者運動」のなかに資源浪費型経済システムへの異議申立てという明確なエコロジーの行動原理を読み解くことができる。

つぎに「生活者運動」研究の中心テーゼであるオルタナティブという形容詞について見ていくと、北村日出夫によれば、「その社会・時代に確立した、既存の伝統的な制度・価値・思想に対して、それに代わる代替的で新しいもう一つの」（北村 1993：128）という意味である。つまり上記で示したエコロジーは、既存の体制の制度・価値・思想にノーを突きつけ代替的な社会を目指すという点で、オルタナティブの一つの形態であり、それを目指す主体こそが「生活者」であると大まかに枠付けられるだろう。

しかし、その一方で、「『生活者』になるための実践が、なぜ、女性だけの、主婦だけのものなのかを開き直って徹底的に対象化する作業がされてこなかった」（天野 1995：59）との指摘のように、実践主体がまとう主婦という立場性を見つめなおす重要性も提起されている。同じく、「生活者運動」をアソシエーション論によって

分析した佐藤慶幸は、「生活者運動」は「男中心の産業社会を批判しながら男に依存する潜在的ジレンマ」（佐藤 1996：120）をもつとし、天野も具体的な課題として、「最大の問題は、全世活（ママ）をかけて選びとったこうした新しい働き方が、メンバーが自立し、生活していく現時的条件をまだつくり出し得ていない点にある」（天野 1988=2009：171）と経済的自立の重要性を指摘する。言うなれば、一方で「生活者運動」のように「資本」に寄与しないような形で自己実現を目指し、「他方では、夫が後顧の憂いなく『資本』の利潤創出に貢献しうるよう、内側からしっかり支えるという矛盾をはらんだ役割を果た」している点について、主婦たちが運動主体であることの、その「弱さ」を指摘した（天野 1988=2009：171）。

同じく「生活者運動」のリーダーであった岩根邦雄とマルクス主義フェミニズム研究者である古田睦美も、「生活者運動」は主婦が担い手である以上「どうしてもジェンダー分業を前提としている」（岩根・古田 2005：29）とし、彼女たちの経済的な依存性について否定的な意見を述べている。さらに金井淑子は意識の面から「（男女の）関係性の変革意識を不問にした生活の変革はありえない」（金井 1992：66、85）と批判し、「男―女」という性別役割規範をのりこえてこそ生活の変革を成しうるのだと説いた。また渡辺登は生活者ネットワークについて論じるなかで、運動が孕む性別役割分業の形成や助長の危険性、社会的・経済的地位が高い専業主婦という階層規定性、議員交代制をめぐるネットワークの組織矛盾について批判をした（渡辺 1995：211-4）。

以上から、「生活者運動」研究における運動主体についての批判は以下の三つに分類できる。(1) 主婦という構造規定性についての批判、(2) 性役割意識についての批判、(3) 性別分業にもとづく「生活者運動」の組織自体のあり方への批判である。

これらの批判の背景として、「生活者運動」研究が蓄積された1990年前後が、家族規範が衰退・弱体化し、女性のライフスタイルの多様化が定着した時代であったことが挙げられる（安河内 2008：160）。具体的には、1983年に共働き世帯が専業主婦世帯を上回り、1986年に男女雇用機会均等法が施行され、1990年に育児休業法が成立したことに見られるよう、女性の「社会進出」への期待が高まった時期でもあった。つづいて1995年に北京で開催された国連世界女性会議、1999年に施行された男女共同参画基本法が象徴するように、1990年以降フェミニズムが社会的に大きく浸透した。ともすれば「フェミニズムの実現のために主婦は消え去るべき」（岩根・古田 2005：29）という風潮のなかで、「生活者運動」への評価には二つの側面があったともいえる。一つは、男性主導の産業社会を問い直す点は評価されつつ、一方で担い手の主婦という立場性と主婦意識は批判された。つまり、(1) 新しい社会運動の一つとして男性中心の産業社会への異議申立ては認定され、(2) 主婦という立場性と主婦意識はのりこえるべきものとされた。

つまり、「生活者運動」研究で取り上げられた「生活者」は、平和運動や女性解放運動などに代表される一つの「新しい社会運動」の担い手として、性別分業と主婦意識をのりこえればという条件付きで、従来の体制を問い直しうる存在として研究者たちに期待をもって描かれた価値関与的な構成概念であったとも言える。ここから、主婦といえば高学歴・高階層で環境意識の高い既婚女性というイメージが定着したが、そのフレームに入りきらない主婦たちも過去のみならず現在にももちろん存在してきたはずだ。しかし彼女たちが言及される機会は少なかった（高野 2005；村上 2010b）。

そこで本稿では、「生活者運動」と似通った主婦という属性をもつ担い手であり、表象的にはオルタナティブな意識、価値志向、行為様式をもつ、ある現代主婦たちを取りあげようと思う。彼女たち「作家さん」と呼ばれ、自分たちでものをつくり、売っている。本稿の目的は、主婦というカテゴリーに沿いながらもオルタナティブをキーワードに主婦の多様性を示すことで、それが示唆する労働と女性とのかかわり方について検証し、「新たな主婦」の可能性を探ることである。

2.「作家さん」とは？

まず、今回の調査対象者となる「作家さん」について見ていく。「作家さん」はハンドメイド作品を制作しそれを販売する人を指す自称であり他称である。定期的、あるいは不定期的にショッピングモールのオープンスペースや神社の境内、スーパーの駐車場や公民館などで雑貨イベントを開催しており、ポーチ、アクセサリー、革財布、洋服、植栽等々、１メートル四方ほどの小さなブースで区切り、思い思いの作品で装飾している。雑貨イベントの主催者は、「作家さん」自身、雑貨店経営者、住宅展示場、ローカル・フリーペーパーを発行する出版社等だ。出店者はイベントの規模により３店程度から100店を超える場合もあり、数ヶ月前から主催者に申し込む。主催者による作品チェックなど選抜があるイベントもあれば仲間内だけの小規模なものまであるが、毎回必ず同一のメンバーが揃うということはない。集団といっても、互いが名前（作家ネーム）は知っている程度のゆるやかなつながりで結びつく一過性の集団であるこ

とが特徴である。客層は同世代の主婦がメインである。

3．方法

3．1．調査時期・調査対象（表１）

調査方法はおもにフィールドワークを行った。イベントオーガナイザーであり皮革小物作家のnanoさんに、調査の目的や公表方法など説明し、ホストパーソンとなることで承諾を得た。第１期は2012年９月から11月、第２期は2013年10月から2014年３月まで、A県内のショッピングモール、神社、総合複合施設、観光スポットなどで開催される雑貨イベントの会場で調査を実施した。

まず第１期には客の呼び込み、レジ管理、荷出し、荷入れなどを手伝いながら「作家さん」の参与観察をした。また、参与観察中接客の切れ目を縫って「作家さん」19人（うち男性３人）への半構造化インタビューを実施した。１日あたり１～５人まで聞き、その日ごとにまず最初の対象者の選定はホストパーソンであるnanoさんにお願いし、その後は近辺で手が空いていそうな人を見つけてはブースの内側に入り、一人15分から30分程度のインタビューを調査ノートに書き取りながら数日に分けて行った。さらに客10人に簡単なアンケートを行った。

第２期ではライフヒストリーインタビューを６人に行った。第１期と同様最初の対象者の選定はnanoさんにお願いした。一人当たり１時間から２時間程度のインタビューをICレコーダーに録音した。

表1.「作家さん」（表2参照）の属性（年齢、作家活動開始の時期は調査時）

１）第１期（2012年９月～11月）

	名前	年齢	家族構成	作品	作家活動開始の時期	技術の習得	販売手段
1	よつば	42	8才(女)	ネイル	２年前	ネイルスクール	開業
2	なないろ	39	夫、21才(女)、8才(女)	樹脂アクセサリー	３年前	独学	委託販売
3	yu*zu*ki	43	夫、15才(女)、12才(男)	陶芸	３年前	陶芸教室	ワンデーショップ→イベント・開業（１年前）
4	ライト	40	夫(会社役員)、12才(女)、11才(男)、9才(女)	革製品、羊毛フェルト	３年前	独学	委託販売
5	flipper ++	33	夫、3才(女)、9才(女)	あみもの、アクセサリー	３年前	小学生の頃の裁縫クラブ	委託販売・イベント
6	hiromi	35	夫、8才(男)、5才(男)	樹脂アクセサリー、羊毛フェルト	３年前	独学	委託販売・イベント
7	a leaf	51	夫、13才(男)、10才(男)	洋服	5,6年前	独学	イベント主催→イベント
8	チョコクランチ	37	夫、16才(5才)	布小物、洋服	５年前	独学	ネットオークション→フリマ、イベント・開業（2年前）
9	tortue	37	夫、6才(男)	手芸、アクセサリー	６年前	独学	ネットオークション→ワンデーショップ→イベント・開業（1年前）
10	sunsabo	39	夫、9才(男)、4才(女)	帆布バッグ	６年前	独学	ネット販売→イベント
11	Picot	N.A.	夫、25(女)、8才(女)	洋服	６年前	独学	ネットオークション→イベント
12	nano	38	パートナー	革製品、布小物	７年前	独学	開業→イベント主催
13	sumu	45	夫、15才(女)、12才(男)	洋服	10年前	独学（母が裁縫好き）	フリマ→イベント（5年前）
14	chi	N.A.	夫、13才(男)、8才(男)	布小物	10年前	独学	開業・イベント
15	cou cou	39	14才(男)、10才(男)	洋服	10年前	独学	委託販売→イベント
16	TOMOTOMO	40	夫、12才	洋服	15年前	独学	フリマ→イベント（5，6年前～）・ネット販売
17	aki（男性）	40	パートナー	革製品	７年前	独学	パートナーの手伝い
18	hana（男性）	43	妻	インテリア雑貨	２年前	独学	パートナーの手伝い
19	NEKO FORCE（男性）	29	妻(29)、0才(女)	革製品、アクセサリー	５年前	独学	パートナーの手伝い→フリマ→ワンデーショップ→イベント主催

２）第２期（2013年10月～2014年３月）

20	99works	39	夫、11才(女)、9才(男)、5才(女)	木工家具	４年前	独学	イベント
21	creer	30	夫、10才(男)、8才(女)、5才(女)、1才(女)	木工家具	４年前	独学	フリマ→イベント
22	petit coco	33	7才(女)	アクセサリー	７年前	独学	フリマ→委託販売・開業・イベント
23	runrun	41	夫、13才(男)、9才(男)	革製品、バッグ	８年前	独学	イベント
24	KERN	43	夫、11才(男)、9才(女)、6才(男)	バッグ、布小物	10年前	前職（スポーツ用品メーカー）	イベント→開業→イベント
25	green	40	夫、13才(女)、10才(男)	革製品、アクセサリー	12年前	独学	委託販売・イベント

3．2．調査内容

参与観察は、イベント会場などの販売の場面で行った。主に観察したことは、会場の設営方法や販売方法などイベントの運営に関すること、「作家さん」同士やその家族たち、客や管理者などさまざまなアクター間の相互作用に関することである。

インタビューにおける調査項目は、第１期は年齢、出身地、家族構成などの基本属性のほか、「作家さん」になった経緯と作家業の現状とヴィジョン、nanoさんのイベントに参加したきっかけなど作家業に関するものである。さらに第２期では第１期の調査項目にくわえて、学歴や年収、配偶者の職業や世帯年収に踏み込んだライフストーリーインタビューを行った。客に対してのアンケートでは、年齢、職業、ハンドメイド作品の魅力、自身の手づくり経験について聞いた[1)]。

4．結果　――主婦的なものと対抗性

本章では、まず「生活者運動」研究において主婦たちに向けられた批判や評価は「作家さん」に当てはまるだろうかという問いを立てそれを探る。上で見てきたように、「生活者運動」研究において担い手の主婦たちは、(1) 男性主導の産業社会を問い直す点は評価されつつ、一方で (2) 主婦という立場性と主婦意識はのりこえるべきものとされ批判されてきた。では、「作家さん」たちはこの二点についてどのように評価できるだろうか。

4．1．男性主導の産業社会を問い直しているか？

第１の評価点である、産業社会の問い直し、すなわち「作家さん」のオルタナティブへの志向性について見て行きたい。これについて「作家さん」は、①売上・効率性を重視している、②原料の安全性などにこだわりは見られないという二つの特徴をとおして見ていく。

4．1．1．売上・効率性を重視

まず第１の特徴として、売上・効率性を重視している点が挙げられる。当たり前のように聞こえるかもしれないが、集客が多く売上が期待されるイベントは出店者が集まり、集客が少ないイベントには集まらない。

木工作家の99worksさんは、「小さなイベント出店はセーブして、国際会議場みたいな大きいイベントだけ出るようにしてる」と話す。99worksさんのような木工作家は棚や机など、作品の搬送、搬出・搬入だけでも大変な労力を要す。イベント主催者でありホストパーソンであるnanoさんに、99worksさんの出店が最近減ったことについて尋ねると「あー、彼女最近売れないから出なくなっちゃったんじゃないかなぁ。大きいの（家具のような作品を会場のあるF県の西側から、東側の）M市までもち帰るの大変だしねぇ」と述べた。

要するにこうだ。出店料はイベントによりまちまちだが、nanoさんのイベントでは1ブース5,000円から6,000円であり、最低でもその出店料を売上として回収しなければ利益は上がらない。しかし、髪留めが一つ100円、ティッシュケースが200円、ピアスが450円という価格世界で、出店料に運搬交通費や食費などの雑費を含めプラスにするのは至難の業である。ましてや99worksさんなど木工作家はオープンシェルフが5,000円、引き出し付きになると１万円近くするなど一品あたりの単価が高くなるため、なかなか売りさばくということは難しい。というのも、nanoさんが主催するイベントの多くはショッピングモールのフリースペースで行われるため、買い手も、買い物ついでの主婦がメインだからだ。そのため、99worksさんは、出店料が１回５万円もするというが、「買うぞーというお客さんだけが集まる」大規模なイベントのみへと出店スタイルを移行する予定であるという。なぜなら、売上が15万円は確保できるという利点を考えれば、小さなイベントへ出店する手間が省けるからだ。

一方、固定のファンが多いアパレル作家のsumuさんのケースは、わざわざ高い出店料を払って大規模なイベントに出店せずとも、nanoさんが定期的に開催する小規模なショッピングモールのイベントのほうが、常連が通いやすく、売上が読みやすいというメリットがある。つまり「作家さん」の作品や制作スタイルによってそれぞれの戦略は異なるが、なぜ異なるかといえば、それは売上や効率性を重視しているからだ。

また主催者側も、出店者を儲けさせ、次の出店へと繋げてもらうために集客の努力を惜しまない。nanoさんはイベント当日までには千単位でイベント告知のチラシを印刷し、連日夜中までかけて会場近辺の集合住宅中心にポスティングを行うという。また自治体へ後援を依頼するなど工夫を重ね、積極的に集客活動に努めている。

くわえて彼女たちが売上や効率性を重視する特徴を示すもう一つの事例として、作家業をパートの代替としてとらえている点が挙げられる。まず、99worksさんは家計補助のためにパートを経験したことがあるが、小学生の子どもの長期休暇に差しかかったこともあり、作家業と天秤にかけた結果、作家業の方が効率がいいと判断しパートは辞めたと話した。sunsaboさんも下の子が未就学のときにドーナツショップのパートをしたというが、「忙しくて、とても（家庭と）両立ができなかった」ため、作家業に本格的に入ることになったと話した。要するに

彼女たちにとって作家業を行うことは、「趣味の延長」や「余暇を過ごす」というよりもむしろ、収入を得るための現実的な手段としてとらえていることがわかる。そのためにパート程度（もしくはそれ以上）の売上をはじき出すことは絶対条件になってくる。繰り返しになるが、彼女たちにとって作家業は子育てとの両立を可能にする家計補助の手段である。

4．1．2．原料の安全性にこだわらない

そしてもう一つの特徴としては、原料の安全性などにこだわりは見られないという点だ。「インターネットでできるだけ安いパーツを探す」（ondeさん、chiさん）、「中国の市場まで安いパーツを買いつけに行く」（happy＊dotさん）、「100円ショップで大量に仕入れて、両面テープでくっつけて売る」（petit cocoさん）など、彼女たちの表層はナチュラル系というスタイルを採用しているが、その原料の安全性や品質に対するこだわりは総じて高くない。具体的には、hanaさんは浜辺や山に行って流木や松ぼっくりを拾ってきて、妻がそれを接着剤で組み合わせ、リースや置物などナチュラル風に加工して売っている。またberryさんは市販の「牛乳石鹸」にセロハンのプリントを貼り付けることで、オリジナルの石鹸として販売している。このように彼女たちは「アイデア」や「工夫」を作品の付加価値として認識しており、原料の安全性や環境を最重要視しているわけではない。

4．1．3．小括

以上のように「作家さん」は、「生活者運動」における主婦たちのように「物質主義的」価値を反省し「脱物質的」価値への転換を求めるよりも、何をすれば自分の売り上げを上げることができるのかということについて重視している。ということはつまり、男性主導の社会体制を問い直しオルタナティブを目指すというよりはむしろ、効率を上げて少ないリスクでリターンを得るという市場の原理を踏襲している。

リネンの衣類をまとい、自然の素材感を前面に出したディスプレイを好み、手づくりという行為様式をその個性とする「作家さん」は、表象的には資源浪費型の産業社会に背を向けているように見えるが、対抗性、すなわち「作家さん」のオルタナティブな価値志向に限れば、「生活者運動」論の主婦たちとは大きく異なっていると評価できる。

4．2．主婦という立場性と性役割意識をもつか？

つぎに主婦という立場性と性役割意識という評価点について、「作家さん」は、①「主婦的なもの」（低価格性、温もり）を押し出している、②家事労働よりも作家業にプライオリティがある、③イベント時の子どもの参加者の多さ、④性的な話題を避けない傾向がある、という四つの特徴をとおして見ていきたい。

4．2．1．主婦的なものを押し出している

まず第１の特徴は、「主婦的なもの」を押し出している点が挙げられる。ここで言う「主婦的なもの」には二つの要素があり、まずは低価格であること、そして、手づくり感という「温もり」である。客の中心層は30から40代の主婦であり、彼女たちの共感を得て売上につなげるためには、何よりも気軽に買える価格帯であることが重要である。nanoさんのパートナーであり皮革小物作家のakiさんは、主催するイベントで出店していた絵本作家が、個展と同価格帯で作品を販売したときにまったく売れなかったというエピソードを話してくれたことがある。akiさんの分析では、「作家さん」の作品を求めてくる客層が支払える金額には暗黙の上限があるため、「強気の価格はそっぽを向かれる」という。購入する側は主婦である以上、彼女たちの生活感覚に近い金額でなければものが売れないのだ。実際、数百円という価格世界はどの「作家さん」のブースにおいても共通しており、同一作品における価格差は、単価が小さなものであれば50円～100円程度に抑えられている。

さらに「作家さん」の作品は大量生産品とは違い一つ一つが手づくりであるという点も「温もり」という魅力の一つになっている。曲がった縫い代や左右の非対称性は、取替え不可能な唯一性を示す。つまり、主婦という立場性を象徴する低価格性と「温もり」というこの二つの特徴は、「作家さん」作品のオリジナリティとなっていることがわかる。

4．2．2．家事労働よりも作家業にプライオリティがある

そして、第２の特徴は、「作家さん」は普段の生活のなかで家事労働よりも作家業を優先する傾向にある。「作業台はダイニングテーブルで、片付けたくないので、脇に寄せて毎日鍋」（CREERさん）、「子どもたちの夕食や入浴は、同居する姉家族にやってもらっている」（STさん）、「子どもは学校からおばあちゃん（実母）の家に帰宅して、お風呂まで全部終わってから、うちに帰ってくる」（petit cocoさん）など、作家業を優先するために、家族成員相互が強い情緒的関係でつながる核家族という「近代家族」のフレームからはみ出る生活実態をもつものも多い[2)]。

さらに「作家さん」のイベント時の楽しみの一つにランチがある。昼時になると会計をほかの「作家さん」に

任せ、ショッピングモールのレストランやフードコート、飲食のブースがあるときはそこに、気の合った仲間同士で連れ立って食事休憩に行く。そこで近況や次の出店計画、仲間や家族のことを話したりしながら１時間ほど過ごすのだが、そこで自前の弁当を持参する「作家さん」は一人もいない。彼女たちにとって自分の作品を販売するイベントはハレの日なのであり、弁当づくりに時間をかけるくらいなら一つでも多くの作品を制作するという目的以上に、仲間と情報を交換し親交を深めるためのランチは重要な意味をもつのだ。

4．2．3．イベント時の子どもの参加者の多さ

三つ目の特徴は、イベント時の子どもの参加者の多さだ。ブースの裏の簡易ベンチで、ショッピングモールのソファで、「作家さん」の子どもたちがポータブルゲームに興じる様子は日常的な光景である。なかにはベビーカーに収まるほどの小さな子どももゲーム機を与えられている。子育て世代の「作家さん」たちにとって上のような実家や親族、夫の協力といったサポート資源が乏しい場合は、留守番のできない小さな子どもたちを会場まで同伴せざるをえない。このような状況下で、ゲームは子どもたちにとって格好の暇つぶし道具なのだ。しかし、子どもにゲームを与えることについては、教育上消極的な評価がなされてきた。本田由紀が実施した家庭教育に関するインタビュー調査では、ゲームの使用について、相対的に母親の学歴が高い方が厳密なルールを定めている傾向があるとの結果が示されている（本田 2008：84-5）。「家の中でだけ30分以下」や「禁止」をするなど、本田の調査で描かれているようなゲームのルールづくりに腐心する母親像とは異なる像を「作家さん」は示す。もちろん「作家さん」たちが日常的に子どもたちにゲームを無制限にやらせているかは不明だが、少なくとも雑貨イベントの場面に限れば、教育と作家業では、後者の方が優先されている。学歴については後述する。

もちろん子どもたちは、ゲーム以外にも、別の「作家さん」のワークショップに参加したり、店番をしたり、おやつを買ってもらったりと、親以外のさまざまなおとなが関与するなかで時間をすごしている[3)]。

以上からわかるように、「作家さん」の活動世界、主に雑貨イベントでの販売という活動に焦点を絞れば、家内領域と公共領域の境目が曖昧になっていることがわかる。子どもはあくまでも親であるそれぞれの「作家さん」に帰属するものではあるが、イベント会場、つまり市場という公共領域から排除されるわけでもなく、逆に主役としてまつりあげられるわけでもなく、ゆるやかに活動世界に包摂されている。市場という公共領域に子育てという家内領域がはみ出し、違和感なく受け入れられている様相からは、「家内領域と公共領域の分離」、「子ども中心主義」という「近代家族」の概念からはずれる家族のあり様が浮かび上がる。

4．2．4．性的な話題を避けない傾向がある

最後の特徴として、性的な話題を避けない傾向を指摘したい。移動中の車内や、仲間内の飲み会の際、性的な話題で大いに盛り上がる。以下は筆者が参加した2012年10月22日の飲み会で交わされた会話である。

「Mくん、Cさんのおっぱい触らせてもらったことがあるんですよ（笑）」

petit cocoさんは恋人のMさんが、Cさんにお願いして胸を触らせてもらったというエピソードを披露した。その後その飲み会に合流したCさんは、ラブホテルでのコスプレ経験など自らの不倫談を披露した。そして帰りがけに「もう離婚したくてしたくて仕方ないと。娘も（不倫を）知っとるし、応援してくれとる。経済的に食べていけるように、だから作家をしとる」と、初対面の筆者に打ち明けた。

もちろん全員がCさんのように性に開放的だと一般化するつもりはないが、他日の参与観察からわかることは、聞き手の「作家さん」を含め性的な話題を忌避していないどころか、誇示的なものであると同時に互いの紐帯を強める手段として受け容れられているという点だ。それは、先述の家事より作家業にプライオリティを置くという特徴を含め、金井が述べた「優等生主婦」、すなわち性別分業に即した、期待される女性像、「女たちは家族

表２．「生活者運動」論における主婦たちへの評価と「作家さん」

	①産業社会への対抗性	②主婦という立場性、性役割意識
「生活者運動」論の主婦たち	・経済成長主義に貫かれた高度産業社会の枠組みを批判 ・せっけんや産直品など原料や安全性にこだわる	・女性自身の「主婦意識」「性役割規範」を深く内面化 ・男性中心の社会を批判しながら夫に依存
「作家さん」	・売上・効率性・合理性の重視 ・原料にこだわらない	・主婦的な二流性を押し出す ・家事労働よりも作家業にプライオリティがある ・子どもの参加者が多い ・性的な話が好まれる

にあってその男たちを支え、新たな労働力を再生産」し、貞操を守りよき母である「良妻賢母」というイデオロギー（小山1991：93）とはかけ離れている。

ここまで来て、彼女たちは「近代家族」の形式である良妻賢母という規範からは少なからずずれていると言うことができる。もちろん彼女たちは、属性上主婦であるものが圧倒的多数であるが、そこには、「生活者運動」論が描いた主婦像とは異なるもう一つの主婦像が浮かび上がる（表２）。

５．考察　――「作家さん」は「生活者運動」につらなるか

以上、「作家さん」の世界を（1）産業社会への問い直し、すなわちオルタナティブへの志向性と、（2）主婦という立場性と性役割意識という二つの観点から見てきた。まず（1）については、①売上・効率性を重視している、②原料の安全性や環境にこだわりはない、とオルタナティブな意識や態度は観察することができないどころか、効率性を追い求める産業社会のロジックに親和的な面もあることがわかった。つぎに（2）主婦という立場性と性役割意識については、①主婦的なもの（低価格性、温もり）を押し出している、②家事労働よりも作家業にプライオリティがある、③イベント時の子どもの参加者の多さ、④性的な話題を避けない傾向がある、という４つの特徴があった。「作家さん」が主体的に主婦意識をのりこえようという志向は見てとることはできなかったが、結果的に「近代家族」の形式である良妻賢母という規範からはズレる部分があるということがわかった。

つまり、「生活者運動」研究による二つの評価点から「作家さん」を見ると、似たような“主婦”という活動主体の属性と表象的特徴をもっているが、大きく異なる主婦像が立ち上がってくる。

そこで本章では、「作家さん」は「生活者運動」論で取り上げられてきた主婦たちと、具体的にどのように違ってどのように同じなのかについて、①学歴、②主婦という立場性、③産業社会への対抗性、④ものに見出す価値について、両者を比較しながら主婦の多様性について検討していく（表３）。

５．１．学歴

まず決定的に異なるのは、学歴である。「作家さん」の大きな特徴として、学歴が相対的に低いことが挙げられる。第１期の調査では学歴を聞いたすべての「作家さん」が高卒であり、第２期の調査では、６人中５人が高卒で、１人が中卒であった。一方で、「生活者運動」の活動主体の特徴として、学歴は「非常に高く、高専・短大、大学卒以上は63.3％にものぼる」（佐藤・天野・那須 1995：197）。「生活者運動」論において、担い手の高学歴という階層の偏りは自明とされ問題とされてこなかったことは指摘されるとおりであり（渡辺 1995：211）、両者は同じ主婦という属性ではあるが、異なる階層に属することがわかる。

表３．「生活者運動」論の主婦たちと「作家さん」の比較

	「生活者運動」	「作家さん」
学歴	高	低
主婦という立場性（理念）	環境・平和志向	子どものためにつくったものがいかに売れるか
主婦という立場性（実践）	家内領域	家内領域
産業社会への対抗性（理念）	○	×
産業社会への対抗性（実践）	○	○
ものに重視する価値	使用価値	交換価値

子どもへのゲームの許容も、母親の学歴による緩やかな差異があるとの報告があることは先に触れたとおりである（本田 2008：116）。本田は「母親たちはそれぞれのやり方で精一杯「家庭教育」をやっている」（本田 2008：118）としながらも、母親の配慮や行動は文化的資源の量と質によって避けがたく規定されていると指摘している（本田 2008：116）。ゲームが子どもに与えるマイナスの影響についての是非はここでは言及しないが、ゲーム許容に学歴の差があるとすれば、雑貨イベントにおける光景は、本田の調査結果を補うものであると言うことはできる。

５．２．主婦という立場性

つぎに性別分業について、理念レベルと実践レベルに分けて考えてみたい。まず、実践レベルにおいては、どちらも家内領域がはじまりの場所であった。先に触れた「生活者運動」の担い手への批判に見られるように、多くの場合、給料を家庭に運んでくる配偶者あってこそ実現可能な運動である。

> 「生活クラブの担い手は「主婦」と呼ばれる女性たちである。「主婦だからこそできる」を運動の出発点としたことに象徴されるように、生活クラブの活動が「主婦」の存在抜きに成り立ちえないことは否めない事実である」（天野 1995：59）

この指摘どおり、「主婦」という家内領域に足場を置

く存在抜きに生活クラブの活動は成り立ちえなかった。主婦だからこそ得た着想、すなわち「この食べ物は安全か？」、「この洗剤は環境を汚していないか？」という問いが「生活者運動」の活動の原点になった一方で、「作家さん」が得た着想は何だったか。フィールド調査からわかったことは、自分の子どものために試作した作品を前に、「これは売れるのか？」というプラグマティックな問いをもち、それこそが作家業の契機となった。

つまり、理念レベルにおいて「生活者運動」研究で対象となった主婦たちが消費の先に環境保全や平和など抽象的な理念を見すえたのに対し、「作家さん」は子どものためにつくった自分の作品がいかに売れるかという実践的な目的が行動原理となった。

このように、理念レベルにおける着想の方向性は違うけれども、活動の原点となった場所は同じ家内領域であった。その意味で、実践レベルにおいては両者ともに主婦という立場性を前提としていると言うことができる。

5．3．産業社会への対抗性

つぎに産業社会への対抗性について、同じく理念レベルと実践レベルに分けて見ていきたい。まず理念のレベルでは、食の安全・新しい労働・新しい政治が生活者「運動」、つまり資源浪費型の産業社会へのオルタナティブの模索こそが「生活者運動」の行動原理であるのに対し、作家業はパートの代替行為として、「子育てと両立しながら家計補助する」という現実的な目的が主だということがわかった。これについては千田有紀が「『近代家族』の変化」と呼んだものと対応する。千田によれば、高度成長をつうじて形成された「近代家族」は、「愛情」のもとで家族の行為が正当化されていたが、それが現代となって「合理性」へと変化したと論ずる。「家庭は損得勘定から逃れた私的な領域であったはずだが、現在は家族という領域において『市場の論理』が使われることに対する抵抗感はあまり存在しない」（千田 2011：102）との指摘どおり、「作家さん」はあっけらかんと稼ぐことを重視し、かつそれを理念という大義名分でおし隠そうとはしない。それは両者を隔てる大きな違いである。

つぎに実践レベルはどうだろうか。「生活者運動」が自然や環境の持続可能な社会の発展を目指すために、産直品の販売や石けんの推奨という消費者運動、遺伝子組み換え食品や原発の反対運動、代理人運動、ワーカーズ・コレクティブという新たな労働の実践を行う一方、「作家さん」は「工夫」を盾に、大量生産に反するハンドメイドという生産手段をもって、独自の生産様式でものを生産し売っている。ここから見えることは「作家さん」の「家計補助のため」という現実的な目的が、結果的に産業社会への対抗性をはらむ実践へとつながっているという逆転である。

5．4．ものに見出す価値

その点をより深く探るために、ここでもう一つ、彼女たちが抱く、ものに見出す価値について考えていきたい。まず、「生活者運動」では環境や安全に配慮した使用価値に価値を見出すのに対し、「作家さん」は作品の交換価値を高めることに腐心している。交換価値、すなわち価格を上げたい、作業効率を上げたいという切実な思いがあっても、どの「作家さん」もうまくいくとは限らない。第２期の収入に踏み込んだ調査によると、彼女たちのほとんどが稼げて月10万円程度であり夫の扶養内での経済活動に収まっている。なぜか。その理由は前節で見たとおり、彼女たちの作品の低価格性にある。「主婦的」であるという低価格性、「温もり」という作品に対する需要は、彼女たちがどんなにあがこうと、ハンドメイドと銘打ったイベントに出店する限り乗りこえることができない。つまり、「作家さん」作品の付加価値は、その裏に隠された「主婦とはこの程度のものだ」という買い手と作り手自身、そして場所の提供者（ここでは主にショッピングモールの管理運営者）の三者に共有された了解であるゆえに、いつまで経っても交換価値を高めることができない。

この点は、次の事例により補強して説明できる。A市では毎年秋に「クラフトマーケット」という手作りのイベントが行われており、多くの「作家さん」にとってこのイベントに出店することは憧れであり目標である。出店経験者であるKERNさんが「びっくりするぐらい高い値段をつけてもばんばか売れる」と表現するように、「クラフト＝工芸」と銘打ったこのイベントは厳しい審査があることで知られており、被調査者のなかでも出店希望を出して断られた経験をもつものが何人かいた。「作家さん」の多くが目指しているのに断られるというこの事態は、「クラフト＝工芸」は「ハンドメイド＝手芸」よりも高いランク付けがなされていることを示している。その説明には山崎朋子が指摘した、手芸にまつわるジェンダー性がぴたりと当てはまる。

> 「「手芸」は日常性や実用性を備えた「手仕事」という意味において「工芸」と明確な区別をすることができない。その差を決定付けるものは、作り手のジェンダーなのである」（山崎 2005：7）

このように近代以降「工芸」が「美術」と「工業」のはざまで多様化した一方、「手芸」は「工芸」から切り離され、伝統的技能を意味する「技芸」に包含されつつ、「伝統的」に「女性」が行なってきた手仕事として位置

づけられてきた。すなわち「ハンドメイド＝手芸」はあくまでも二流の“芸”であり、それを作り手である「作家さん」も買い手である主婦も出店を許諾する会場の提供者も共有するがゆえに高い交換価値をもたないのだ。

6. 結論 ――「もう一つ」のフェミニズム

以上、「作家さん」の活動が「生活者運動」研究で描かれた主婦たちに向けられた批判や評価が当てはまるかどうかを検討しながら、両者を具体的に比較・検討してきた。

では、具体的に、本稿の目的である、「生活者運動」研究を補足することはできただろうか。これまで「生活者運動」研究において画一的な主婦像がとりあげられたなかで、本稿では似たような表象をもつ「作家さん」をとりあげ、それぞれの活動へのかかわり方についての理念と行為の非一貫性を描くことによって、主婦の多様性を示すことができた。それにより、渡辺（1995）が指摘するような「生活者運動」研究の階層規定性への視点の欠落を補足し、「生活者」という概念自体が構成概念であることを明確にした。このように本研究の意義は、階層や社会的な状況によって、主婦という立場性や性役割という意識のありようが異なる可能性を補足したことである。

さらに、主婦の多様性を導き出した本稿のエヴィデンスは、同時に、女性の労働とのかかわり方の多様性、つまり「新たな主婦」の可能性も仮説的に示唆する。「これまでの主婦」、すなわち、正規雇用やパート労働、内職など、企業との雇用契約にある主婦、あるいはまったくない主婦についての研究は蓄積されてきたが、雇用契約にない主婦たちの自発的な労働という点で、「生活者運動」研究の主婦と「作家さん」の行為は共通していた。その労働は無償労働と有償労働の境界を曖昧にし、性によって割りふられた性別分業の定義、そして公私の領域すら、わずかながらも書き換えていく可能性を読み取ることができる。

「生活者運動」研究において、活動主体である主婦たち自身の性別分業が問われたのは上述のとおりである。その方策として、天野は、産業社会自体を問い直し、夫をも巻き込む理論構築こそが主婦性をのりこえるために必要であると説き（天野 1988=2009：172）、佐藤もオルタナティブ社会を求めるために「自己決定の自由を獲得していく必要がある」（佐藤 1996：136）とし、金井も「『フェミニズムの視点』は不可避的な課題。制度・意識両面からの主婦意識の脱却を必要とする」（金井 1992：85）と述べ、フェミニズムの視点を導入することによって制度だけでなく根強く残る性役割という意識ものりこえる必要があると論じた。

一方で「作家さん」はどうだろうか。主婦意識からの脱却を大仰に宣言することなく、意識することもなく、しかし、仲間との活動をとおして知らず知らずのうちにそこからの脱却を可能とする素地を展開してしまう、そのようなあっけらかんとした「もう一つの」フェミニズムの可能性を、「作家さん」はもち合わせている。

【注】

1) 第１期と第２期で記録方法が手書きとICレコーダーで異なるのは、第１期は筆者自身も「作家さん」風の一人として参与観察を平行していたこともあり、なるべく「調査者 - 被調査者」という「おおげさな」関係性を避けたかったという意図がある。一方第２期はインタビューを中心に据えた調査であったうえに、年収や学歴などを中心に数値を聞く内容であったために録音を選択した。さらに作家名については承諾を得たものはそのまま用い、仮名を希望したものについては筆者が作成した仮名を用いた。仮名を作成する際に気をつけたことは、作家名は屋号であり、主に外国語を用いるなどその個性を示す特徴の一つであるため、できる限り雰囲気を残すようにしたことである。また、本稿を公開するにあたり、掲載したすべての調査対象者には承諾を得ている。

2) 落合によると、「近代家族」の特徴は以下の８つである。すなわち、家内領域と公共領域の分離、家族成員相互の強い情緒的関係、子ども中心主義、男は公共領域・女は家内領域という性別分業、家族の集団性の強化、社交の衰退、非親族の排除、核家族である。

3) 筆者も何度か小学生の子どもを連れて調査を行ったのだが、子どもがいても違和感のない、かといって干渉されすぎない空間は子どもにとっても居心地がいいらしく、他日筆者が一人で調査に行くと子どもから「なぜ連れて行ってくれなかったのか」と抗議を受けたこともあった。

【引用文献】

安立清史, 2008,『福祉NPOの社会学』東京大学出版会.

天野正子, 1995,「「生活者」概念の系譜と展望―生活者運動の形成に向けて」, 佐藤慶幸・天野正子・那須壽編『女性たちの生活者運動 ――生活クラブを支える人びと』マルジュ社, 17-69.

天野正子, 1988=2009,「「受」働から「能」働への実験－ワーカーズ・コレクティブの可能性」, 天野正子・伊藤公雄ほか編,『新編日本のフェミニズム4　権力

と労働』岩波書店, 148-179.
朝倉美江, 2002,『生活福祉と生活協同組合福祉：福祉NPOの可能性』同時代社.
江原由美子・金井淑子編, 1997,「ワードマップフェミニズム」新曜社.
本田由紀, 2008,『「家庭教育」の隘路――子育てに脅迫される母親たち』勁草書房.
岩根邦雄・古田睦美, 2005,「生活者運動の昨日・今日・明日―サブシステンスの視点で労働と生活の作り変えを」『社会運動』200：20-53.
金井淑子, 1992,『フェミニズム問題の転換』勁草書房.
北村日出夫, 1993,「オルタナティブ・メディア」『新社会学辞典 第４版』有斐閣, 128.
小山静子, 1991,『良妻賢母という規範』勁草書房.
Mies, Maria., Thomsen, Veronika Benholdt., Werhof, Claudia von.,1988,1991, *WOMEN: THE LAST COLONY*, London, Zed Books.（＝1995, 古田睦美・善本裕子訳『世界システムと女性』藤原書店.）
Mies, Maria., 1986, *Patriarchy and Accumulation on A World Scale*, London, Zed Books.（＝1997, 奥田暁子訳『国際分業と女性』日本経済評論社.）
三隅一人, 2008,「社会関係資本としての学校――若年層の職業機会を中心に」太郎丸博編『2005年SSM調査シリーズ11　若年層の社会移動と階層化』, 37-55.
村上潔, 2010a,「「主婦によるオルタナティブな労働実践」の岐路――ワーカーズ・コレクティブはどう変わっていくのか」, 山本崇記・高橋慎一編,『「異なり」の力学――マイノリティをめぐる研究と方法の実践的課題』, 生存学研究センター報告：166-19.
村上潔, 2010b,「「主婦論争」再検討　―論調と対象の再整理からみる課題と展望―」『現代社会学理論研究』4, 160-712.
仁平典宏・山下順子編, 2011,『労働再審５　ケア・協働・アンペイドワーク　―揺らぐ労働の輪郭』大月書店.
萩原なつ子, 1997,「エコロジカル・フェミニズム」, 江原由美子・金井淑子編『ワードマップ フェミニズム』新曜社, 292-317.
岡田百合子・村上潔, 2012,「変容する女性主体の協同労働のありかた：ワーカーズ・コレクティブの現在的意義を見据える（特集 女性と貧困）」『現代思想』40（15）：145-157.
佐藤慶幸, 1996,『女性と協同組合の社会学　―生活クラブからのメッセージ』文眞堂.
佐藤慶幸, 1994,「女性の社会参加」, 原ひろ子・大沢真理ほか編『ジェンダー』新世社, 108-121.
千田有紀, 2011,『日本型近代家族――どこから来てどこへ行くのか』勁草書房.
高野剛, 2005,「内職・家内労働研究の課題と分析視角--在宅ワーク研究の進展のために」,『大原社会問題研究所雑誌』（564）, 47-6.
上野千鶴子, 1990,『家父長制と資本制　―マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店.
上野千鶴子, 2011,『ケアの社会学　―当事者主権の福祉社会へ』太田出版.
渡辺登, 1995,「「主婦」から「全日制市民」そして「生活者」としての「女性」へ」, 佐藤慶幸・天野正子・那須壽,『女性たちの生活者運動　―生活クラブを支える人びと』マルジュ社, 175-219.
Werhof, Glaudia von,. 1988, The proletarian is dead: Long live the housewife!, *Women: The Last Colony,* London, Zed books,（＝1995, 古田睦美・善本裕子訳『世界システムと女性』藤原書店.）
大和礼子, 2002,「「家事」はどのようにとらえられてきたか？―「公共／家内領域の分離」という社会認識との関連から」,『関西大学社会学部紀要』, 33-3：75-135.
山根純佳, 2010,『なぜ女性はケア労働をするのか　―性別分業の再生産を超えて』勁草書房.
山崎朋子, 2005,『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房.
安河内恵子, 2008「子育てと地域社会」, 森岡清志編,『地域の社会学』有斐閣, 141-169.

The Possibility of “Handmade-Housewives” being seen as “New Housewives” -- And the theory of the “Seikatsu-sha movement”

Wakako SATOMURA
GRADUATE SCHOOL OF SOCIAL AND CULTURAL STUDIES

This article will confirm whether or not “Sakka-san”, or “handmade-housewives”, are followers of the consumer movement, “Seikatsu-sha movement”. This article will make use of data from fieldwork conducted with “Sakka-san” and aim to discover what differences exist between “housewife-ness”, that is to say those who fit the model of the housewife, and those who oppose the male oriented industrial society. Results in this paper reveal that the concept of the housewife is not sufficiently dealt with in the consumer movement. In cases where the choice of becoming a ”Sakka-san” was influenced by pragmatic concerns, there remains the possibility of opposing and finding an alternative to the industrial society.

Key words: housewives, alternatives, field work